



(取材・文=玉木 郁子)



特定非営利活動法人 パンゲア理事長

森 由美子 さん

Yumiko Mori

PROFILE

アメリカで大学生生活を送り、幼児心理学・幼児教育学を専攻。スタンフォード大学 Schizophrenia Biology Research Center, Palo Alto で研究員のもと、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 教育学部 博士課程を中退し、帰国。玩具メーカーのトミーに入社。幼児玩具開発事業室室長を務め、国内外の玩具賞を受賞。独立後、マサチューセッツ工科大学メディアラボにおいて Visiting Scientist を務める。2001年に子どものワークショップセンター CAMP を企画し立ち上げる。2003年4月 NPO 法人パンゲア設立。理事長を務めて現在にいたる。パンゲア HP <http://www.pangaean.org/>

「先生、ケニアはだいたいどうぶかな？ ケニアにはほとくの友だちがいるから心配なんだ」

二〇〇八年、アフリカのケニアで暴動が起きた翌日、テレビでそれを知った少年はクラスの担任教師に不安げに尋ねたという。少年には世界のあちこちに友だちがいる。少し前までは「どこか遠い国」としか思っていなかった外国も、今では大好きな友だちが暮らす大切な国だ。

彼を変えたのは、「パンゲア」。それはインターネット上で世界の子どもたちが知りあい、ともに遊び、つながることのできる場所である。国境を超えた若き友情の輪は、今、刻々と広がり始めている。その仕掛け人である NPO 法人パンゲアの理事長、森由美子さんに話をうかがった。

人生を変えた二度の衝撃

二〇〇一年九月一日。森由美子さんはアメリカでハイジャックされて墜落した飛行機 U A 93 便に乗る予定だった。自ら立ち上げた玩具メーカーの仕事の打ちあわせのためボストンからサンフランシスコへ飛ぶはずだったが、その数日前「資料作りがまにあわない。日にちを変えてほしい」と先方からキャンセルが入る。やむなくキャンセルした飛行機が、同時多発テロの標的となった。

「それを知ったときは本当に鳥肌というか。後日、延期した打ちあわせのためサンフランシスコに飛んだのですが、帰り際、飛行機に乗るのが急に怖くなってしまつて。しかたなく、ボストンまで車で延々と時間をかけて帰つたのです」

その帰り道、何気なくかけていたラジオから、アメリカ人たちによる衝撃的な声が聞こえてきた。「アラブ人は不気味で怖い」「アメリカに外国人を受け入れるからこんなことになるのだ」。

「ステレオタイプの発言に強い危機感を覚えました。インターネットはこんなに普及しているのに、人と人は離れていくばかり。自分に何かできないかと真剣に考え始めました」

自分の命はあの日に奪われていたかもしれない。そんな思いも森さんの背中を押した。

「そしてパンゲアの構想を思いついたのです。子どものころに世界じゅうの子とコミュニケーションをとったり一緒に遊ぶ機会をもつことができれば、いざ海外で何か起こったときにも『あの国には○○ちゃんがいる。だいたいどうぶかな？』と、国や宗教の違いなんて関係なく、親身になって想いやることができましょね」

玩具の開発から手を引いた森さんは急ピッチで準備を進め、二〇〇三年に NPO 法人パンゲアを設立した。「パンゲア」とは大昔五大大陸が一つであった

ころの超大陸の名に由来している。

**目の前にいない友だちを
想像し、想いやる力**

パンゲアの拠点は二〇二一年末現在、東京、京都、三重、韓国、オーストリア、ケニア、マレーシアに置かれている。小学3年生から中学3年生までの子どもたちが、毎月一、二回それぞれの拠点(学校、児童館、博物館など)に集まり、設置されているインターネットで専用のカードを使ってパンゲアネットにアクセスする。そして国内外の拠点にいる子どもたちと交流するのだ。ちなみに拠点のことを「村」と呼び、その村には一人ひとりの「家」がある。

「パンゲアに参加した子どもたちにはまず家の絵を描いてもらいスクリーンで読みこみます。家の中の部屋には自分のプロフィール、名前の読み方を録音した音声ファイル、得意技を映した動画などを置き、パンゲアネットに公開します。その家に興味をもった子どもたちが訪ねてきて、交流が始まるという流れです」

しかし交流といっても、子どもたちの母国語は日本語、韓国語、ドイツ語、スワヒリ語、マレーシア語とさまざまである。

「言葉をつかわなくても気持ちや伝えあえるように、ピクトンという約五百種類の絵文字を子どもたちと一緒に開発しました。さらに最近では、もっとも具体的なメッセージを交わせるように言語グリッドも導入。これを使えば、自分の母国語を一瞬で相手の母国語に変換することができます。『好きな食べ物は何?』『どんな音楽が好き?』といった何気ない

会話をとおして、肌の色や言葉が違っても『こんなにも自分に似ている子がいるんだ』ということを感じてほしいのです」

ときには世界の複数の拠点をウェブカメラでつなぎ、それまではメッセージだけのやりとりだった子どもと直接顔をあわせ、交流することもある。「恵比寿村&ソウル村チーム」というように国と国が手を組んで高得点を狙うゲームなどを行えば、両画面の前で大盛り上がりだ。たとえば「赤といったら何?」

わたしの 原動力

「子どもの笑顔を見たいから
アイデアはどんどん
わいてくる」

との問いに、恵比寿村とソウル村がそれぞれ答えを考え、二つがみごとに合致したらOKというゲーム。「きっと韓国の子はキムチを想い浮かべるよ」と話しあい、答えの欄に「キムチ」と書いた恵比寿村。それに対し「わたしたちはキムチだと思っけど、日本の子はあまり辛い物を食べないかも」と話しあい、「トマト」と書いたソウル村。

「ハイッと答えあわせをしたら不正解。でも相手が自分たちのことを考えてくれたことがわかるから、悪い気はしないのです」

子どもたちは夢中になって遊びながら、いつの間にか心と心の距離を縮めていく。パンゲアにはこうした遊びのコンテンツが豊富に用意されている。

「パンゲアにあるルールはたった一つ。『人のいやがることは絶対にしないこと』です」

シンプルなことだが、文化、宗教、社会的背景などが異なる相手だからこそ、思わぬ失敗もある。

「小学生くらいの男の子って、車にひかれる絵とかガイコツの絵とかが好きなんです。でもケニアは交通事故や暴動が非常に多い国。『ケニアの子が悲しい体験をしているとしたら、この絵を見てどう思うかな?』と問いかけると、子どもははっと気づき『パンゲア・ルールだから、やめよう』と消し始めます。ついこの間はナイフの絵を描いた子がいたんですけど、そのときは子どもたちだけでアドバイスしあい、別の絵に書き替えていました。成長を感じてうれしかったですね」

想像力や思いやりは子どもたちのやわらかな心にすくすくとはぐくまれていく。そのためか、パンゲアの教室には元気な笑い声とともに、優しい空気が流れている。

すべてのアイディアは
子どもたちの笑顔から

「わたしはずっと好きなことをやってきました。というより、好きなことしかやっていないのです」

森さんはきっぱり言う。幼いころに祖父から「これからの国際化の時代にしっかりと対応できるように教育を受けることが大事」と教わり、高校はインターナショナルスクールへ。カルフォルニア大学に入学してからは、十一年間アメリカに暮らした。その間、幼児心理・教育におもしろさを感じて学び、アメリカの幼稚園にも四年間勤務。帰国後は、幼児が、考えながら遊ぶ。知育玩具の開発に力を注ぎ、起業もした。

「これまでに何万という子どもたちと向きあい、一人ひとりの心を感じてきました。そのためか、わたしには子どもの気持ちや考えがけっこうわかるんですよ」

子どもがさみしそうにしていたりつまらなそうにしていたら、「どうしたら笑顔になれるかな」と考える。知育玩具のヒット商品もパンゲアの新コンテンツも、アイディアの出発点は子どもの笑顔である。また森さんが生み出すすべてのものに、子どもたちの成長を願う心が見え隠れする。

「パンゲアの活動をとおして、子どもたちにコミュニケーションのスキルが身につけばいいなと考えているのです。スキルとはいかにうまくしゃべれるかではありません。自分が相手に伝えたいことをどれだけもっているかが大事。パンゲアでは、ゲーム好きの子が自らゲームを作ったり、絵の得意な子がそれを手伝ったりというように、自分の得意な手法をとおして人に何かを伝える楽しさも体験できま

す。周りから「すごいね!」「おもしろい!」と言われれば自信が生まれ、精神的にも強くなりやすいよ」

好きなことはできるだけ早く見つけ、時間をかけて腕を磨いていくことが将来につながると、森さんはいう。

「そのとき大人が気をつけなくてはいけないのは、『〇しなさい』と言わずに、どんなときも子どもに選択肢を与えること。とくに子どもは親の顔色を気にしますから、強制されると自分の好きなことを抑えがちになり、その先冒険する意欲も失せてしまうのです。逆に選択肢のなかから自ら選び、進んでいく行為は、将来強く生きる力にもつながります」

世界のかけ橋になれる日本人

パンゲアは近年ユネスコと提携し、タンザニアやルワンダにも拠点を設置する準備を進めている。なかには電気もインターネットも引かれておらず、太陽電池などを用いてゼロから作りあげなくてはならない村もある。

「ゆっくり広めていこうとは思っていません。なぜなら全世界の子どもたちにもやってもらわないと意味がないですから」

森さんは新コンテンツを開発するかたわら、世界の拠点を飛び回り、普及活動や子どもたちのサポートとなる現地ボランティアに向けた講習会を開くなど超多忙な日々を送っている。よくいわれるワーク・ライフ・バランス、という点からいえば、「きつと最悪。でも好きな仕事だから楽しいですし、休みよりも子どもの笑顔のほうがずっとエネ

ルギーになるんです」と笑う。

「わたしは、世界の人たちのかけ橋になれるのは日本人のかなと思うのです。日本人は相手がどんな宗教でも興味をもって話を聞けるし、好きな音楽にしても洋楽から民族音楽まで幅広い。いろいろなものに関心をもてる民族だと思うのです。それに「NOと言えない日本人」といわれますが、裏返せば人の気持ちを察せる優しさがあるということ。するとこの国へ出かけても好感をもってもらえます。たとえ仲がよくない国どうしても日本人が間に入ることです。『Open Tent』になる。その感覚がすごく大事なのではないかな」

パンゲアで育ち卒業した青年たちは、いま徐々に社会へ羽ばたき始めている。彼らの心の中には、世界の友だちの笑顔や言葉が生き続け、それらはやがて少しずつ未来を変えていく力になるだろう。



◀それぞれが自由に描いた「家」を完成させたマレーシアの子どもたち。「子どもたちと一緒に活動する時間がいちばん楽しい」と森さん。



▶パンゲアではいつも子どもたちの笑顔がたえない。



◀パンゲアには「先生」という立場の者はおらず、「ファシリテーター」という子どもの楽しい居場所づくりをサポートするボランティアがいる。子どもたちにとって重要な役割であるため、森さん自ら現地へ赴き研修を行っている。